

日本史教科書的美術史(二) ——江戸文化の時代区分の検討——

矢島 新

前稿「日本史教科書的美術史(一)」では室町時代から江戸時代初期にかけて検討を加えた。本稿では江戸時代中期から後期の検討に進むが、まず時代区分の問題に焦点を絞り、各時期の問題点は次稿で扱う。

《「宝暦・天明期の文化」の登場》

筆者は毎年数種の新しい日本史教科書に目を通して、数年前に新しい『詳説日本史B』(山川出版社、二〇一二年文部科学省検定、執筆〓老川慶喜、加藤陽子、五味文彦、坂上康俊、桜井英治、笹山晴生、佐藤信、白石太郎、鈴木淳、高埜利彦、吉田伸之)以下このシリーズを前稿同様『詳説』と略記)を手にとって、前年のもの(二〇〇六年検定)との小さからぬ変更に気付いて驚いた。江戸時代の中・後期を扱う第8章「幕藩体制の動揺」の第2節として、「宝暦・天明期の文化」という耳慣れないセクションが新たに加え

られていたからである。

旧版『詳説』の近世の記述は、第6章「幕藩体制の確立」、第7章「幕藩体制の展開」、第8章「幕藩体制の動揺」の三章で構成され、

- 第6章、1. 織豊政権、2. 桃山文化、3. 幕藩体制の成立
- 第7章、1. 幕政の安定、2. 経済の発展、3. 元禄文化
- 第8章、1. 幕政の改革、2. 幕府の衰退、3. 化政文化

とそれぞれ三節に分けられていた。文化については「桃山文化」、「元禄文化」、「化政文化」という三つの節が置かれ、さらに6―3「幕藩体制の成立」には、「寛永期の文化」という小項目も立てられていた。すなわち近世の文化は数年前まで四期に分けて述べられていたのだが、最新版『詳説』は第8章の第2節に「宝暦・天明期の文化」を割り込ませて、五期に細分したのである。この四期から五期への変更は、江戸文化の記述がより詳しくなったことを意味して

おり、喜ばしい改訂といふべきなのだが、はからずも化政文化というよく知られた歴史用語が抱える問題点を露呈させたように思われる。

「元禄文化」と「化政文化」という用語は、元禄年間(一六八六～一七〇四)や文化・文政年間(一八〇四～三〇)に生み出された文化のみを言うのではなく、「元禄年間を中心とした江戸時代前半の文化」、「文化・文政年間を中心とした江戸時代後半の文化」というほどの意味で用いられていたはずである。細かなことを言えば、井原西鶴の代表作のうち『好色一代男』は天和2年(一六八二)、『好色五人女』と『好色一代女』は貞享3年(一六八六)の作で、いずれも元禄年間以前の作であるが、もちろん西鶴は元禄文化を代表する作家と認識されているし、この三作も元禄文化に含めて考えられているだろう。

化政文化の検討は本稿の大きなテーマだが、『詳説』をはじめとする従来の教科書は、それが適切であるかどうかは別にして、「化政文化」という語に、一八世紀半ばから幕末に至るまでの百年以上をカバーする「江戸時代後期の文化」という意味合いを持たせていたはずである。手元の一九八一年版の『詳説』には、「江戸時代の後期になると、文化の中心はしだいに上方から江戸にうつってきた。それは江戸の繁栄が目ざましくなったためで、一九世紀初めの文化文政時代に最盛期を迎えたので、これを化政文化とよんでいる」という記述があり、化政文化という概念が広義なものであることを明示している。

旧版『詳説』の化政文化の項には、池大雅・与謝蕪村・円山応挙・鈴木春信らが名を連ねている。彼らは皆十九世紀を迎えることなく没しており、しかも化政文化は江戸が中心であると明言されているにもかかわらず、春信以外の三人は京都の絵師である。これは項目名や記述内容とのかなり重大な齟齬と言わねばならないが、「化政文化」という用語が「江戸時代後期の文化」という広義の意味を持つと理解されていたからこそ、これまでさほど違和感をもたれなかったのだろう。

二〇一二年の大きな改訂で宝暦・天明期(一七五一～八九)の文化を独立させたのは、そのような項目名と内容がかい離する不都合の解消を意図しての改善策であったと思われる。ただ、宝暦・天明期を切り離してしまうと、「化政文化」が担っていたはずの江戸時代後期の文化の総称という意味合いは薄れ、「文化・文政年間の文化」の意味が強くなる。

ところが最新版『詳説』の「化政文化」のページに掲載される作品一覧表を見ると、浮世絵については葛飾北斎の「富嶽三十六景」、歌川広重の「東海道五十三次」と「名所江戸百景」、歌川国芳の「朝比奈小人嶋遊」とすべて天保期以降の作、渡辺華山の「一掃百態」は文政元年の作だが「鷹見泉石像」は天保8年(一八三七)の作であり、文化・文政年間以降の作品が大半を占めている。

実を言うと、文化・文政年間には、教科書に取り上げるほどの名作は少ない。もちろん当時の浮世絵師を代表する北斎は極めて作画期間が長く、四〇代半ばから六〇代に相当する文化・文政年間にも

読本の挿絵などを中心に旺盛な作画を行っているのだが、彼の画業を代表する富嶽三十六景をはじめとする錦絵の名作は、ほとんどが七〇歳を過ぎた天保年間の作である。広重と国芳はともに寛政9年（一七九七）の生まれだが、錦絵の仕事が増えて、浮世絵師として頭角を現すのは天保年間に入ってからである。文芸に関しては曲亭（滝沢）馬琴や式亭三馬らを文化・文政年間の作家と呼ぶことができるのだろうが、美術に関しては、文化・文政年間はピークどころか、むしろ谷間と呼んでもおかしくない時期なのである。

そのような状況を鑑みると、江戸時代後期の文化を化政文化と呼ぶのははたして妥当なのかという疑問が沸き起こってくる。もちろん文化は文学や芸能、思想、宗教など多くの要素が絡み合うものであり、美術の観点だけで結論を急ぐわけにはいかない。では美術と並ぶ文化の両輪である文学に関して、化政文化という時代区分は有効なのだろうか。

《文学研究者からの提言》

化政文化という概念に対する違和感は、実は中野三敏らの近世文学研究者が早くから表明していた。中野の主張は、自身が編集した『日本の近世12. 文学と美術の成熟』（中央公論社、一九九三年）巻頭の、「十八世紀江戸の文化」という一篇に示されている。江戸中期以降の美術を考える際にも有益な指摘なので、少し詳しく紹介しよう。

中野は十八世紀後半こそを「近世文化の最盛期」と考えている。「元禄文化、化政文化」といった把握の仕方でも、その根底はこの近代主義的評価の表れ」であり、「文学史における前期の代表といえ、きまって西鶴・近松・芭蕉であり、後期のそれが、馬琴・三馬・一九といったところに代表されるのが常識となっているあたりにその事情がつぶさにあらわれているとみてよい。右に挙げたような作家はおおむね近代主義的に観て評価しやすい、いわゆる「俗」文学の旗手である」と、近代史学の評価軸の偏りを喝破する。

さらに「従来の近代主義的見方は、近世を前期と後期に二分して、その前期のピークを元禄に、後期のそれを化政期に置き、前期を上の方文化の、後期を江戸文化の時代と規定するのが常であった。このとき、前期から後期へと移る中間の部分は、まさに二つのピークの間、の時期ゆえ、当然のこと過渡期、さらには谷間の時期として処理されるのが常識でもあった」と従来の史観を批判的に整理し、「谷間の時期といわれた十八世紀を、もっとも近世らしく充実し成熟した時期」とみなす新しい史観を提唱している。

十八世紀後半を江戸文化のピークと見るのは中野だけではない。今紹介した中野の編著には、跡見学園女子大学の同僚で、戯作研究で知られる岩田秀行も「戯作の二重構造と江戸文化」という論考を寄せており、「十八世紀後半はの宝暦〜天明の文化こそが、江戸という土地に初めて花開いた新しい文化なのである。（中略）宝暦〜天明と文化文政の間には、寛政の改革という大きな変化がある。寛政以降は文化の質が明らかに大衆化され、下落してしまっている。つ

まり爛熟の時代である。しかし、それは元禄文化が爛熟したのではなく、宝暦→天明に新しくおこった江戸文化が爛熟したのである。文化文政は宝暦→天明に続く時代に過ぎない。その価値からいえば、十八世紀半ばの宝暦→天明期こそが、新たな江戸文化として特筆されなければならない」と述べ、「歴史の教科書の記述は早急に書き改められる必要がある」とまで踏み込んだ発言をしている。二〇一二年検定の『詳説』に「宝暦・天明期の文化」という項目が加えられたのは、中野や岩田の主張がようやく実現したと見ることができ

る。中野や岩田は、近代につながる要素だけが評価されがちであった従来の視点を改めて、江戸の人々の視点に立ち返って江戸文化をとらえようとしていた。中野は雅と俗の融和に江戸文化の成熟を見ようとする。「わかりやすく言えば、「雅」なるものの特色は品格にあり、「俗」なるものの特色は人情味、暖かさにあると規定しえたとして、さてその上で、「雅俗融和」とは、品格を重んずる「雅」の中にあつて、なお人肌の暖かさが備わり、人情味豊かな「俗」中にあつてなお凛然たる品格が保たれるものといえよかろう。そして、このような「雅俗融和」の文化こそが十八世紀のもつとも近世らしく成熟した文化であるというべきなのである」と述べ、日本文化のオリジナリティについて考慮した上で、十八世紀後半の戯作文学を高く評価するのである。

十八世紀後半の宝暦→天明期を十九世紀に入った化政期より高く評価すべきとする時代認識は、美術史の立場からも首肯される。中

野や岩田は、宝暦→天明期の雅と俗が融和する重層性を評価しているが、美術においても、京都では応挙の写実画風、若冲の独特の濃密表現、蕪村の俳画に見る軽やかさなど様々な画風が競い合い、江戸では春信の清楚な美少女から歌麿の妖艶な美人まで、実に多彩な錦絵が咲き誇っていた。主に江戸を舞台に展開した司馬江漢や小田野直武らの洋風画をこれに加えても良いだろう。そのように上方と江戸の二都においてともに重層的な展開を見たことは、他の時代には見られなかった大きな特色である。それは文学における表現スタイルの多様性と、軌を一にしている。

江戸時代後期の美術と文学の盛衰は、ともに十八世紀後半をピークとする放物線を描く点で一致しているように思われる。文化の両輪というべき美術と文学のピークがともに宝暦→天明期であるならば、化政文化という文化史の時代区分の有用性にはますます大きな疑問符がついてしまう。そもそも「化政文化」というキーワードは、いかなる経緯で使われ始めたのだろうか。以下に詳しく検討してみよう。

《明治時代の教科書》

筆者が確認できた最初期の日本史教科書は、明治5年(一八七二)の『史略』や明治8年の『日本略史』などの文部省の編纂になるものである。ともに歴代天皇の事績を中心に、頼朝や秀吉といった権力者の伝記を並べる読物風で、文化にはほとんど触れていない。

文化に関する記述がみられる古い例は、明治15年（一八八二）に大槻文彦が著した『校正日本小史』あたりかと思われる。大槻は初の近代的な国語辞典である『言海』を著した著名な国語学者である。この教科書が江戸時代の文化について記すのは、「綱吉ノ政 文学盛ニ興ル」、「和学及ビ尊王ノ説起ル」、「蘭学及ビ海防ノ説起ル」、「文化文政ノ政」という四つの項目で、時代区分としては、綱吉の時代すなわち元禄時代と文化文政年間の二つが取り上げられている。早くも明治15年の時点で、元禄と化政をピークと見る江戸文化史観（以後「典型」と呼ぶ）が登場しているのである。

フェノロサや岡倉天心が美術作品の調査に着手するのは前年の明治14年（一八八一）のことなので、日本美術史はまだ姿を現していない頃である。大槻には江戸時代の美術に関する知識はほとんどなかったはずで、文化関係の具体的な人名は、「綱吉ノ政 文学盛ニ興ル」の項に芭蕉の名がみえるだけである。「文化文政ノ政」の項には、「国内甚々無事ニシテ文学技芸ノ道モ、亦殊ニ盛ニ行ハレ、世上実ニ太平ノ状ノ極ム（中略）コレヲ文化文政ノ太平トイフ」という記述があり、明治15年において、文化文政年間は太平の世であり、文学技芸が盛んな時代であったと認識されていたことが分かる。天心が東京美術学校で講義を始めるのは明治23年（一八九〇）のことである。その講義録『日本美術史』については前稿（一）で触れたが、天心は室町時代以降を四期に分け、第一期東山時代、第二期豊臣時代、第三期寛永時代、第四期寛政時代としていた。すなわち江戸時代の美術のピークを、寛永年間と寛政年間に見たのである。

まだ二〇代の天心が、ほんの数年間の調査研究で導き出したことを考慮すれば、実に卓見であると感服する。寛永時代を代表する絵師として探幽・常信・一蝶・光琳を挙げているので、光琳が活躍した元禄時代まで含めた広義の時代区分であることが分かるが、元禄ではなく寛永を冠したところが見識であろう。

天心は四つの時代区分を示した後に、「寛政の後、文化文政の頃にいりて、文晁、抱一等を出だし、また盛時の観ありといえども、抱一が光琳を学ぶがごとき、もともと復古にすぎず。四条派は応挙の趣きを保続するのみ、別に一期を設くるの必要なし」と述べており、十八世紀末の寛政年間に重視し、十九世紀初頭の文化・文政年間を軽く見る史観を示している。これもまた卓見である。この天心の見解は初めて世に現れた江戸絵画史論であるが、あくまで東京美術学校内での講義であって、書籍や論文が刊行されてすぐ世に広まったわけではなかった。

日本史教科書の検討に立ち戻ると、明治24年（一八九一）の荻野由之『中等教育 日本歴史』（博文館）に具体的な文化の記述はない。「堀田正俊綱吉ヲ擁立ス」という元禄頃の項目に儒学興隆のことが記され、後半には「文化文政ノ極治」という項目が置かれており、大槻の打ち出した典型を受け継いでいることが分かる。法制史の専門家である荻野は、美術にはあまり関心がなかったらしい。一八世紀後半のいわゆる田沼時代の項目は「明和安永の弊政」とされており、元禄と化政に挟まれた谷間の時代と見なされている。

明治26年（一八九三）の新保磐次『日本史要（下）』（金港堂書籍）

は、江戸文化を「徳川氏繁昌ノ世一」、「徳川氏繁昌ノ世二」、「徳川氏衰弱ノ世」の三つに分けて論じている。「徳川氏繁昌ノ世一」は十七世紀前半を扱い、美術の項に光悦と又兵衛、技術の項に探幽を取り上げている。続く「徳川氏繁昌ノ世二」は十七世紀後半を扱い、やはり技術の項で菱川師宣と鳥居清信を取り上げている。

十七世紀前半の江戸時代初期を、世紀後半の元禄と分けて論ずるかどうかは教科書によって違いが見られ、この新保の教科書は、十七世紀の前半と後半を分けた初期の例として重要である。三項目目の「徳川氏衰弱ノ世」は江戸時代後半を扱っており、人物の項に「画工ニハ文晁最著シ、浮世絵師ニハ北斎豊国アリ。北斎の絵ハ西洋人最称スル所ナリ。其ノ他応挙ハ写生ニ長ジ司馬江漢ハ我が国洋画師ノ始メナリ」と記している。文晁・北斎・応挙・江漢の四人は、明治のころからその西洋画的な写実性が高く評価されていた。

明治27年(一八九四)の田中稲城・赤堀又二郎『中等教科日本歴史』(文学社)では江戸文化を分割せずに、一括して述べる方式をとっている。この一括スタイルは、とくに大正時代中期以降の教科書にしばしば見かけるようになる。

明治30年(一八九七)の藤岡作太郎『国史綱』(錦光館)は重要な意味を持つ教科書である。藤岡は帝国大学文科の出身で、明治33年(一九〇〇)から帝国大学助教として日本文学史を講じた碩学であるが、美術にも造詣が深く、明治36年(一九〇三)には美術史の専門書である『近世絵画史』を上梓している(後述)。この『国史綱』でも文化にかなりページを割いているが、注目されるのは

「風俗の変遷」という項目で「寛永風」と「元禄風」を分けて論じていることと、「寛政前後の文学技芸」という項目を立てていることである。後者には「美術は政事よりも少しく後れて盛なるものなり」という本質を突いた記述があり、池大雅、祇園南海、柳里恭(柳沢淇園)、円山応挙、谷文晁、司馬江漢、喜多川歌麿、歌川豊国、葛飾北斎の名を挙げている。祇園南海(一六七六・一七五一)や柳沢淇園(一七〇三・一七五八)から、豊国(一七六九・一八二五)や北斎(一七六〇・一八四九)まで含んだこのリストは、「寛政前後の文学技芸」というこの項目が江戸後期の文化全般を扱っていることを示しているが、それを藤岡は「寛政前後」と呼んだのである。美術に造詣が深かった藤岡は、寛政年間を重視する天心の江戸美術観を知っていたに違いなく、その影響を受けたことが考えられる。

明治31年(一八九八)の芳賀矢一『修正新撰帝国史要』(富山房)は文化を扱う項目を立てていないが、「綱吉の治世」と「家斉の末年」という項目の中に江戸文化の記述を組み込んでおり、元禄と化政を重視する大槻の典型を引き継いでいる。このあたりで典型がまさに典型として確立したとみて良いだろう。芳賀も帝国大学文科の卒業で、藤岡の先輩として一足早く帝国大学教授となつて国文学研究の基礎を築いた大物であるが、美術にはあまり関心がなかつたようである。

《二〇世紀初頭の三つの著作》

二〇世紀の初頭には三つの重要な著作が刊行されている。明治34年（一九〇一）の『稿本日本帝国美術略史』（農商務省）、明治36年（一九〇三）の藤岡作太郎『近世絵画史』（金港堂書籍）、それに大正2年（一九一三）の黒板勝美『国史の研究 各説の部』（文会堂書店）である。

まず『稿本日本帝国美術略史』は、東京美術学校を追われた天心の後を引き継いだ福地復一が中心となつて編纂した初めての日本美術史の概説書、しかも公的な概説書である。一九〇〇年のパリ万国博覧会に際してフランス語で出版され、翌年に日本語版が出版されている。図版を豊富に使つたかなり詳しい概説書で、刊行後は大きな影響力を持つたと思われる。江戸時代は第三編「足利氏幕政時代より徳川氏幕政時代に至るまでの美術の変遷」の第三章「徳川氏幕政時代」で論じられるが、室町時代から江戸時代までを一続きと見る史観は、編纂事業当初の責任者であつた天心を引き継ぐものだろう。

この第三章「徳川氏幕政時代」は、第一節「当代美術に及ぼせる社会の状況」、第二節「当代美術の変遷及び特質」、第三節「絵画」、第四節「彫刻」、第五節「美術的工芸」の五つの節で構成されている。第一節と第二節で時代の概況を述べ、具体的な作品はジャンル別に論じるといふスタイルである。前稿（一）で美術史の概説書にジャ

ナル別の記述が多いことに触れたが、その先駆けがこの書であつた。第二節「当代美術の変遷及び特質」の中にさらに項目は立てられていないが、各段落の頭に「慶長より凡そ五十六年」、「所謂元禄時代」、「享保より宝暦に至る凡そ四十余年」、「明和の頃より」、「文化文政より慶応の間」という文言が見えて、五つの時期に区分していることが分かる。三つ目の「享保より宝暦に至る凡そ四十余年」は『詳説』の空白地帯に当たる期間であり、それ以外はほぼ最新版『詳説』と同じ時代区分である。

記述の分量をみれば、「慶長より凡そ五十六年」と「明和の頃より」の二つの箇所、すなわち寛永年間と、明和年間から寛政年間にかけてが、元禄年間や最後の化政年間より充実している。寛永年間と明和・寛政年間をピークと見る点で、『稿本日本帝国美術略史』は天心の江戸美術観を引き継いでいる。そしてそれが当時の多くの教科書が採用していた典型とは異なることに、注意しておく必要がある。

明治36年（一九〇三）に出版された藤岡作太郎の『近世絵画史』については先に触れたが、刊行後百年以上を経た今日でも輝きを失わない優れた著作である。その章立てを確認すると、第一期「狩野全盛 寛永の頃を主として、ついでに遙かにその後におよぶ」、第二期「横流下行 元禄の前後より、享保に至るまでのことを主とす」、第三期「旧風革新 享保以後、宝暦を經、安永期を中心として、寛政におよぶ」、第四期「諸派角逐 寛政より文化、文政を中心とし、天保を經て、維新の際におよぶ」、第五期「内外融化 明治の初年

より、その三十五、六年頃までのことを概説す」の五期に分けてい
る。第五期は明治時代なので、江戸時代の区分は四つである。

『近世絵画史』が享保から寛政までの約百年を一つのまとまりとし、
『稿本日本帝国美術略史』がその前半のやや停滞した四〇年を区分
した点を除けば、両者の時代区分はほぼ重なり、それは最新版『詳
説』とも重なっている。二十世紀初頭の段階で、十八世紀後半をき
ちんと評価する著作が現れていたのである。

この『近世絵画史』は各項目の記述も詳しく、美術史の専門書と
いうに恥じない。残念なことに藤岡は、明治43年(一九一〇)に四
一歳という若さでこの世を去ってしまう。文学史にも美術史にも明
躍し続けていたら、その後の日本史教科書の文化の記述は違った展
開を見せていただろう。

大正2年(一九一三)出版の『国史の研究 各説の部』は、当時
の学会の権威である東京帝国大学国史学教授黒板勝美の代表的な
著作である。明治41年(一九〇八)の『国史の研究』(文会堂)の
続編であり、当時の日本史研究の水準を示す大著である。黒板はま
ず『国史の研究』において研究の方法論を示し、四年後の『各説の
部』で時系列に従った概説に挑んだのである。

前稿(一)でも述べたように、両書は文化をあまり重んじていな
い。『各説の部』の江戸時代的美術の記述は、「幕府修飾期」という
項の「画家にあつては狩野探幽以来幕府に狩野派の画所が出来たが、
是に至つて禁裏画所預士佐光起の門人住吉具慶を江戸に召し下して

土佐派絵所となし、狩野派と対立せしむることとなつた、その他浮
世絵の流行、戯作者の排出など当時の文芸は既に上流のみでなく、
下層の人々も漸く文芸趣味を知つてきた」という箇所と、「幕府極
盛期」の項の「画家にも池無名(大雅堂)、円山応挙の如き大家あり、
応挙の門には松村月溪別に四条派を創め、谷文晁は殊に定信の知遇
を受けて文晁派を興し」という箇所のみであり、元禄と化政を重視
する典型を引き継いでいる。幕府との関わりで住吉派と文晁が特記
される一方、浮世絵に関しては北斎などの具体的な人名は挙げられ
ていない。美術としての価値より、政治との関わりが重視されてい
ることが歴然である。

黒板はこれより早い明治38年(一九〇五)に、『日本歴史』(吉川
弘文館)という教科書を執筆している。そこにやはり文化の記述は
少なく、「元禄時代」の項目中で、探幽・光起・師宣・光琳の四人
に言及しただけであった。何と言つても帝大の国史研究の中心にい
た人物だけに、黒板の執筆した教科書の影響力は大きかつたものと
思われる。

以上の明治時代の状況をまとめると、初期の教科書に文化の記述
はなかつたこと、明治15年(一八八二)の大槻文彦の教科書あたり
から文化に関する記述が始まるが、そこに美術に関する言及はな
かつたこと、同教科書では元禄と化政が文化面で特別な時代とされ
たこと、それはまた美術史の研究が始まる前のことであつたこと、
岡倉天心の『日本美術史』には寛永年間と寛政年間を重視する史観
が見られること、天心の江戸美術観は『稿本日本帝国美術略史』や

藤岡作太郎の『近世絵画史』に受け継がれたこと、一方元禄と化政にピークを見る典型は萩野由之や芳賀矢一に受け継がれ、学会の重鎮である黒板勝美の名著にも採用されたこと、などが指摘できるだろう。

美術史の研究が本格化する前に、泰平の時代であるという理由で元禄年間と文化文政年間を特別視する史観が出来上がり、大物研究者たちに受け継がれたことの意味は大きい。その後天心によって美術史学の基礎が固まり、藤岡の『近世絵画史』のような十八世紀後半に目配りした書物も刊行されたのだが、歴史学・文学史・美術史の三者をつなぐ存在になりえた藤岡が夭折してしまったこともあって、教科書の軌道を修正するには至らなかったのである。

《大正》昭和戦前期の教科書

引き続き、大正から昭和戦前期の教科書を検証しよう。

まず典型に分類されるものに、大正5年（一九一六）の辻善之助『重修新編国史教科書』（金港堂）がある。辻は東京帝国大学国史科を卒業後に同大学史料編纂掛に入所、後に東京帝大教授を務めるなど、3年先輩の黒板とともに戦前の史学会を牽引した大物である。この辻の教科書の江戸文化の記述はまさに典型であり、「元禄時代」の項に狩野探幽・土佐光起・住吉具慶・尾形光琳・菱川師宣・宮川長春・岩佐又兵衛・英一蝶の名を挙げ、「文化文政並天保時代」の項に円山応挙・谷文晁・葛飾北斎・歌川豊国を列挙している。「田

沼時代」の項には「人民大に苦しむ」の文言があるばかりで、文化の記述はない。

大正中期以降になると、江戸文化を区分せずに一括して記述するタイプが主流になってくる。大正6年（一九一七）の藤岡継平『続一中等歴史教科書』（六盟館）、大正10年（一九二一）の峯岸米造『中学校用歴史教科書日本歴史』（六盟館）、大正11年（一九二二）の中村孝也『修正中等日本史』（晚成処）、大正14年（一九二五）の三省堂編輯所『中等教科日本歴史教科書上級用』（三省堂）、芝葛盛『重修中学日本歴史』（明治書院）、藤井甚太郎『中学日本歴史教科書』（瞭文堂）など、多くの教科書が江戸文化を区分せずに一括して記述している。

一括記述によって文化の扱いは軽くなったのだが、時代の変遷を説明しやすくなった面もあった。すなわち文中に「家光の頃」や「元禄の頃」といった文言を入れることにより、十七世紀の前半と後半を、区別して論じやすくなったのである。多くの教科書は江戸時代初期を「家光の頃」と呼んでいるが、昭和2年（一九二七）の中村孝也『再修中等日本史』（晚成処）では「寛永の頃」としている。

江戸後期については「家斉の頃」あるいは「文化文政の頃」と呼ぶ教科書が多く、「化政文化」という語はまだ用いられていないが、全体としては典型的の範囲に収まっている。

江戸文化の一括記述は、美術史の概説書と歩調を合わせているように見える。『稿本日本帝国美術略史』以降、日本美術史の概説書はなかなか現れなかったが、大正年間になると、大正3年（一九一

四)の黒田鵬心『日本美術史講話』(星文館)、大正5年の原貫之助『日本美術史教科書』(目黒書店)、大正7年の我妻栄吉『日本美術概要』(岩田遷太郎)など、日本美術史概説書の刊行が相次いだ。それらは絵画・彫刻・工芸の別はもちろん、絵画についてはさらに狩野派、南画、浮世絵などのジャンル別・流派別に記述するものがほとんどで、江戸文化を輪切りにして時代ごとの特徴を把握しようとする意識は薄かった。藤岡の『近世絵画史』が時代を区分していたのとは異なる記述法が主流になったのである。このジャンルや流派別の記述は、昭和以降の多くの概説書にも受け継がれていく。

昭和に入ってから教科書にそれほど目立った変化はないが、徐々に文化の記述が減っていくように感じられる。昭和20年(一九四五)の『歴史皇国編』(中等学校教科書株式会社)では、儒学や国学・蘭学には触れるものの、美術や文学についてはまったく言及がない。文化などと言っている余裕のない時代だったのだろう。

《大正～昭和戦前期の概説書》

昭和戦前期の日本史概説書にも触れておこう。

まず取り上げるのは、昭和3年(一九二八)の栗田元次『綜合日本史概説 巻下』(中文館書店)である。この概説書では江戸文化を三分し、十七世紀を「国民文化の興隆」、十八世紀を「文運の東漸」、十九世紀を「江戸文化の爛熟」と呼んでいる。「文運の東漸」の項には「明和・安永・天明に及んで」という文言があり、十八世紀後

半の江戸市中の文化に焦点が当てられている。十八世紀を評価した点で、画期的な概説書であった。

昭和5年(一九三〇)の京口元吉『日本史概説講義案』(広文堂書店・早高堂書店)は、「武家時代の絵画」という項目で鎌倉時代から幕末までを一括して記述する独自の構成だが、江戸時代についてはやはり「江戸時代初期」、「元禄時代」、「明和・安永・天明」、「文化・文政・天保」の四つに区切っている。

この二書は、歴史学においても十八世紀後半の文化が評価され始めている状況を示す例であるが、昭和15年(一九四〇)の川上多助『日本歴史概説(下)』(岩波書店)では、元禄と化政をピークとする典型に戻っている。

概説書執筆者の履歴を見ると、栗田元次は東京帝国大学国史学科を卒業した黒板や辻の後輩だが、近世史を専門にしていた。京口元吉は早稲田大学文学部史学科の出身で、やはり近世史が専門である。近世史の専門家には、十八世紀後半の文化の重要性が見えていたのだろう。

一方、黒板勝美は古代史、辻善之助は仏教史、川上多助は平安朝史が専門であった。戦後の史学会をリードした坂本太郎なども含め、日本史概説書の執筆者には古代を専門にする者が多かった。彼らにとって江戸文化はもともと専門から遠い分野であり、その記述に当たって、大槻文彦や芳賀矢一といった名だたる先輩が創始した典型を踏襲するケースが多かったということだろう。

《戦後の概説書》

戦後まもなく日本史概説書が相次いで刊行されている。まず一九四九年に豊田武『概説日本歴史』（大阪教育図書）が出版されている。豊田は中世商業史を専門としていたが、この書では江戸時代前期の文化を「興隆期の文化」、後期を「江戸文化の爛熟」と二分して論じており、やはり典型を引き継いでいる。

一九五〇年の原田伴彦『日本史概説（下）』（SKJK）は文化を一括論述するタイプである。原田は新聞社勤務などを経て、大阪市立大学などで教鞭をとった研究者で、被差別部落落史を専門にしていた。この書では第23章「町人社会」の後半が文化の記述にあてられ、前期の京阪文化と後期の江戸文化が対比的に論じられている。ここでいう京阪文化は元禄文化のこと、後者の江戸文化とは江戸市中の文化のことで、「十八世紀中葉の明和安永の頃より十九世紀初頭の文化文政に至る時代は文字通り江戸文化がさん然たる光を放ったとき」であるとされ、十八世紀後半が肯定的に組み入れられている。「もちろん江戸後期に入っても、上方文化が衰えたわけではない」としながらも、文化の中心が上方から江戸に移ったという図式である。江戸文化全体を二分して論ずる点では典型を引き継ぐが、十八世紀後半を評価する点では典型を改良している。

一九五一年には坂本太郎が『日本史概説下巻』（至文堂）を出版している。坂本は教授として戦後の東大国史学科再建に尽力した大

物研究者で、古代史が専門であった。この書も基本的には典型を踏襲しており、第五篇近世の第三章「国民文化の興隆」で元禄時代を中心とする前期の文化、第四章「封建社会の動揺」の中で後期の文化を扱っている。十八世紀の文芸に関しては「文芸の盛期は前代の元禄時代であり、この期に入ると爛熟・頹廢の相を呈した」とやや否定的な見解を述べているが、浮世絵に関しては「天明・寛政期に勝川春章・鳥居清長・喜多川歌麿・鳥文斎英之・東洲斎写楽等の名手が出て錦絵黄金時代を迎えた」と述べて、十八世紀後半を評価している。やはり典型の改良型といえよう。

一九五三年の石井良助『日本史概説』（創文社）は、個人の執筆による概説書の掉尾を飾る一冊である。前稿（一）で石井が東大法学部出身の法制史の専門家であることと、東山文化に関するこの書言を持つていた。すなわち「桃山文化より元禄文化へ」という項目を置いて、十六世紀後半からの百年余を一括して論じたのである。

さらに石井は、江戸後期を「田沼時代」と「化政時代」に分けて論述している。戦前の栗田元次の概説書を受け継ぐ時代区分である。「田沼時代」には「安永文化期の文化」という小項目を置いて、「江戸時代後半期の文化は、文化文政時代に爛熟したものととして、この時期に代表されるものとし、これを文化文政期の文化、略して化政期の文化というのが普通である。しかし、江戸時代後半期の文化全般に着眼するときは、むしろ、その全盛期は、安永より文化にかけての、四十五年間にあり、それ以前の宝暦、明和の二十九年間は、

正徳享保とともに元禄文化より安永文化期の文化に移る過渡期、文政以後の四十年は、安永文化期の文化の頽廢期として観察すべき」という卓抜な見解を披露している。十八世紀後半と十九世紀を分けたことと、十八世紀後半こそが江戸文化のピークであるという図式を示した点で、実に画期的な概説書であった。

この石井の著作以降、日本史概説書は分担執筆の時代に入る。トップバッターは一九六一年に東京大学出版会から刊行された『日本史概説』で、東大教養学部日本研究室の9名による分担執筆であった。児玉彰三郎が担当した江戸時代の文化は、「近世」の第二章第六節「学問の発達と元禄文化」と第三章第五節「江戸後期の町人文化」に分けて述べられており、後者には「その頂点に達したのが化政期」といった文言も見える。分担執筆の概説書は、やはり典型の踏襲からスタートしたのである。

以上戦後間もなくの概説書を振り返ると、元禄と化政をピークと見る典型を引き継ぐものと、十八世紀後半を高く評価する新たなタイプに、二分される状況だったことが分かる。中でも石井良助の江戸文化観は卓抜なものであったが、石井は東大法学部の出身で、国史学科出身でなかったからか、その声は教科書の記述を変ええるには至らなかったのである。

《戦後の教科書》

戦後の日本史教科書は様々な出版社が参入して、実に多くの種類

が出版されている。幸い東京書籍が運営する東書文庫という教科書図書館や、公益財団法人教科書研究センターの教科書図書館が利用できるもので、なるべく多くに当たろうと努めたが、そのすべてに目を通すことは困難であった。ここでは山川出版社のものを中心に、戦後しばらくの時期の教科書を検討してみる。

まず一九五二年に、山川出版社の『日本史』（史学会編、代表 宝月圭吾）と三省堂の『新日本史全』（家永三郎著）が刊行されている。山川出版社と三省堂は戦後の日本史教科書を牽引していく出版社であるが、前者が分担執筆、後者が個人による執筆であった。ただ両者ともに元禄と化政を江戸文化のピークとしており、戦前からの典型を引き継いでいる。江戸後期については両教科書とも化政文化とは呼んでおらず、「江戸（庶民）文化の成熟」という項目名を採用している。

山川出版社の『日本史』を編集したのは史学会という組織である。一八八九年に帝国大学文科大学（現在の東京大学文学部）の史学科内に設置された東大アカデミズムの牙城である。その編集になる『日本史』は毎年のように改訂を重ねるが、江戸文化の記述は基本的に典型が続いた。

『日本史』の七訂版が出版された一九六〇年に、山川出版社が『日本史』シリーズと並行して新たにスタートさせたのが、しばしば言及している『詳説日本史』である。初版の著作者は宝月圭吾と藤木邦彦。執筆者はこの2名のほかに井上光貞、大久保利謙、笠原一男、児玉幸多の4名。いずれも史学会の面々である。大久保は大久保利

通の孫で6名の中では最も年長、宝月と藤木は東大国史研究室の教授、児玉は宝月や藤木と同じ世代だが、笠原と井上は一〇歳ほど若い。

『詳説』はタイトルが示すようにそれまでの『日本史』シリーズを一段と詳しくした教科書で、前稿(一)で問題にした『濃絵』などの新たな用語を盛り込んでいた。この初版の『詳説』は、「元禄文化」と「江戸後期の文化」の二つの項目で江戸文化を論じており、やはり典型を踏襲している。

『詳説』シリーズの典型踏襲はしばらく続くが、一九六五年版からは江戸後期の文化を「化政文化」と表記している。これまで多くの教科書は「文化文政期の文化」や「町人文化の爛熟」といった項目名を用いることが多かったのだが、「元禄文化」と対照させるように「化政文化」の呼称を採用したのである。当時の執筆者の専門領域から判断するに、近世担当であった児玉幸多の意見による変更であったと思われる。

日本史概説書に十八世紀後半を高く評価するものがいくつか現れていることを考えると、当時の日本史教科書は保守的だったと言わざるを得ない。ただ教科書というものの性格上、急激な変更が難しいことは理解できる。まず個別の研究論文が現れ、学会等で合意が形成され、しかる後に教科書に反映されるのが手順というものである。十八世紀後半の文化を重く見る史観は、まだ学会のコンセンサスを得るには至っていなかったのだろう。

『一九六八年の教科書』

戦後の日本史教科書は多くの出版社が実に多くの種類を発行している。筆者が目を通したものに限っても、そのすべてをここで紹介することは難しい。便法として一九六八年に発行された教科書を例にとり、江戸文化の記述を確認してみよう。一九六八年は教科書にとって特別な年ではないが、東書文庫で11社14種類の多数を確認できることと、この頃教科書の記述が安定期に入ると判断されるからである。そのほとんどは、江戸文化を前期と後期に二分して述べるものであった。

まず山川出版社からはこの年3種が発行されている。①『改訂版詳説日本史』（宝月圭吾・藤木邦彦）、②『改訂版要説日本史』（宝月圭吾・藤木邦彦）、③『精選日本史』（児玉幸多・笠原一男・井上光貞）の3種で、江戸文化の項目は3冊すべて「元禄文化」と「化政文化」と表記している。「濃絵」の記述があるのは①のみであり、3種の中では①の「詳説」がもっとも詳しい内容と位置付けられていることが分かる。①と②では俵屋宗達を桃山文化で扱っていることも留意される。

三省堂からは④『日本史改訂版』（稲垣泰彦他3名）と⑤『新日本史改訂版』（家永三郎）の2種が刊行されている。両者とも典型タイプで、項目名について④は前期を「元禄文化」、後期を「文化の爛熟と新しい学問・思想」とし、⑤は「元禄時代の文化」と「文

化文政時代の文化」としている。

残る9社は各一種のみを発行しているが、すべて江戸文化を二分して記述しており、典型と言いつけるものである。それぞれの前期と後期の項目名を列記しよう。

- ⑥ 実教出版『高校日本史4訂版』(西岡虎之助)「元禄文化」・「町人文化の成熟」
- ⑦ 帝国書院『高等学校新日本史』(安田元久他)「元禄文化」・「化政文化」
- ⑧ 東京書籍『改訂日本史』(風間泰男他)「元禄文化」・「化政文化の展開」
- ⑨ 二宮書店『詳説新日本史』(和歌森太郎・芳賀幸四郎)「近世文化の形成と展開」・「町人文化の発達と学問の新潮流」
- ⑩ 自由書房『要説日本の歴史』(竹内理三・小西四郎)「学問の興隆と町人文化の発達」・「町人文化の爛熟と新しい学問・思想」
- ⑪ 修文館『日本史改訂版』(後藤陽一・松岡久人)「元禄文化」・「化政文化の特色」
- ⑫ 好学社『新編高等学校日本史』(坂本太郎)「国民文化の興隆」・「江戸文化の形成」
- ⑬ 秀英出版『改訂日本史』(藤木邦彦)「元禄文化」・「文化・文政の文化」
- ⑭ 中教出版『新版日本史』(豊田武他)「元禄文化」・「町人文化の成熟と新しい思想」

以上14種のうち、前期を「元禄文化」と表記するのは11種、後期を「化政文化」とするのは6種、「文化・文政(時代)の文化」とするものが2種である。江戸文化を二分して記述する典型は完全に定着し、「元禄文化」の語もほぼ定着、「化政文化」はほどほどの浸透度といったところだろうか。

江戸前期に関して注目されるのは、①と②では俵屋宗達を元禄文化に押し込まずに、桃山文化の項で扱っていることである。⑧の東京書籍の教科書では「桃山文化」の項に「桃山文化の継承」という小項目を立てて、宗達や光悦だけでなく狩野探幽や住吉具慶までそこに組み入れている。9年後の一九七七年の『詳説日本史改訂版』(井上光貞・笠原一男・児玉幸多)において、桃山文化や元禄文化とは別に、「江戸初期の文化」という小項目が立てられるのだが、宗達の扱いについて、『詳説』執筆陣が試行錯誤していることが読み取れる。

《文部省学習指導要領の検討》

「化政文化」という用語は、そのように一九六八年の時点ではまだ半数ほどの教科書しか採用していなかったのだが、当時の学習指導要領には、どのように規定されていただろうか。

まず一九五六年の学習指導要領では、近世は「封建制度の完成と鎖国」と、「封建制度の崩壊」の二つに分けられており、前者には

「町人の台頭と元禄文化」、後者には「化政文化」の項目が置かれている。戦後間もなくの時点で文部省が典型を求めていたことと、元禄文化と化政文化の用語が明記されていたことが分かる。

一九六〇年の学習指導要領になると、近世は「封建社会の確立と文化の興隆」と、「封建社会の動揺と文化の成熟」に分けられ、前者に「文化の興隆」、後期に「町人文化の成熟」という項目が置かれている。この時元禄文化と化政文化の二つの用語は明記されていなかったのだが、先に分析した一九六八年の14種の教科書は、この学習指導要領に準拠するものであった。

一九七〇年の学習指導要領では、近世は「近世文化の成立と展開」という標題にまとめられており、その中に「国内の統一と文化の形成」、「幕藩体制の成立と鎖国」、「産業経済の進展と元禄文化」、「幕政の推移と化政文化」、「封建社会の動揺と新しい学問・文化」という5つの項目が置かれている。元禄文化と化政文化が再度明示されたのである。

この時の学習指導要領は記述が詳しく、次の説明文も付されている。

安土（あづち）桃山時代の文化の形成については、宗教的拘束から離れた新鮮な文化が生まれたことを、国内の統一の進展と関連させながら理解させる。南蛮文化に触れる。幕藩体制の成立については、身分制度の確立、幕府と藩との関係などを取り扱う。元禄文化については、儒学を中心とする学問の発達や上

方を中心とする町人文化の興隆を、経済の発展や社会の安定と関連させて理解させる。化政文化については、江戸を中心とする文学・美術・芸能の発達、教育の普及、庶民の信仰生活の動向などに触れる。国学・洋学などの新しい学問・思想については、封建社会の動揺と関連させて取り扱うとともに、それらが後の政治や社会に及ぼした影響を理解させる。

この説明文では、元禄文化の箇所に美術への言及がないこと、元禄文化が上方の町人文化と規定されていること、化政文化が江戸中心と規定されていること、などが留意される。江戸文化のピークを元禄と化政にみる典型は、文部省の学習指導要領に明記されたことよって、一九七〇年代に国民の常識となったのである。

その後の学習指導要領は、次第に記述が簡略化する傾向が認められる。一九七八年版では「幕藩体制下の文化の動向」という標題にまとめられ、その中身は「ヨーロッパ文化との接触と鎖国」、「幕藩体制と封建思想の展開」、「町人文化の発展と農村の生活文化」、「封建社会の動揺と新思想の展開」の4つの項目だけであり、元禄文化や化政文化といった用語も、江戸文化を前期・後期に二分する典型さえも明記されなくなっている。

学習指導要領は以後も簡略な記述が続き、一九九四年版も二〇〇六年版も、一九七八年版とほぼ同工である。教育現場が江戸時代の文化は詳しく教える必要がないと受け取るとすれば問題だが、教科書記述の自由度が増していると見れば、歓迎すべき傾向かもしれない。

い。

以上をまとめると、一九七八年までは文部省の学習指導要領によつて高校の日本史で元禄文化と化政文化を教えるべきことが規定されていたが、以後は縛りがゆるくなつて、自由な記述が許容される状況になつたことが分かる。

《専門書間の振幅》

一九七〇年代以降の日本史専門書や概説書を確認しておこう。

まず一九七六年に、林屋辰三郎編による『化政文化の研究』(岩波書店)という専門書が出版されている。林屋をはじめとする京都大学人文科学研究所のメンバーを中心とする関西の第一線の研究者16名が最新の研究成果を寄せたもので、詳細な「化政文化年表」も付されている。アカデミックな研究者の間で「化政文化」の呼称が完全に承認されていることが分かる。

一九八八年に刊行された山川出版社『日本歴史大系3 近世』(編集 井上光貞・永原慶二・児玉幸多・大久保利謙)は、『詳説』執筆陣とほぼ同じメンバーを編者とする五冊(別巻索引編を含めれば六冊)からなる大部の日本史概説シリーズの一冊で、箱入りの立派な装丁には、いかにも概説書の決定版という風格がある。この第3巻近世編は児玉が編集したと思われるが、その章立てを記してみる。

第一編 幕藩体制の成立と展開

第一章 織豊政権

第二章 桃山文化

第三章 幕藩体制(1)

第四章 幕藩体制(2)

第五章 農村支配と農民

第六章 元禄時代

第七章 元禄文化

第二編 幕藩体制の展開と動揺

第一章 享保の改革

第二章 都市と産業の発達

第三章 宝暦〜天明期の政治と社会

第四章 寛政の改革

第五章 文化・文政時代

第六章 化政文化

第七章 天保の改革

一見して分かるように、文化に関しては「元禄文化」と「化政文化」を前面に押し出した典型中の典型である。これまで見てきたように、十八世紀後半の明和〜寛政時代を文化・文政年間より高いピークとみる概説書もいくつか現れているのだが、そのような意見は一顧だにされていない。もはや典型は、不動の地位を得たと言つてよいだろう。最初に触れたように『詳説』の江戸文化の記述は、二〇一二年まで典型が続くのである。

ただ、注意しておかねばならないのは、その後の日本史概説書が、必ずしも典型一色に染まったわけではないことである。前稿(一)で室町文化を検討した際に、一九九三年の『日本歴史館』(小学館)が北山文化にほとんど言及していないことに触れたが、同書第6室「天下泰平」という江戸時代の箇所を見ても、そこに「化政文化」という項目は見当たらない。小学館は同じ体裁の『日本美術館』という姉妹編を一九九七年に出版するので、美術はそちらに任せるといふ編集方針があったらしく、同書にはそもそも文化に関する記述が少ないのだが、「スーパ―歴史館 元禄の装飾美術」というコラムページは設けており、元禄文化については一定の配慮を見せている。

《三省堂の『詳解日本史』》

筆者が調べた教科書はほんの一部に過ぎないので、他に重要なものを見落としている可能性は高いのだが、典型に席巻されていた感のある江戸文化の記述に一石を投じたのが、一九九〇年に登場した三省堂『詳解日本史』(青木美智雄・深谷克己他9名)である。

この教科書は山川出版社の『日本歴史大系3 近世』のわずかに2年後に出版されたものだが、近世文化を「桃山文化と江戸初期の文化」「町人文化の形成」「新しい学問・思想の誕生と民衆文化」「民衆文化の成熟」の四つの項目に分けて論じている。二つ目の「町人文化の形成」が元禄文化、最後の「民衆文化の成熟」が化政文化

に相当するが、その用語を使っていないのは見識というべきだろう。懸案の江戸初期については桃山文化と一体の記述とし、十八世紀後半の文化については「新しい学問・思想の誕生と民衆文化」の項を設けて独立させている。典型が日本史教科書を席巻していた当時としては、画期的な時代区分と言ってよいだろう。個別の画人や作品の選定については次稿に譲るが、この教科書は岡空も取り上げているし、いまだに多くの教科書が取り上げない伊藤若冲をはやくも載せている慧眼には敬服する。

この『詳解日本史』の江戸文化の記述は、その後の三省堂『日本史B』シリーズに基本的に受け継がれるが、少しずつ変更も加えられている。手元の二〇一四年版(青木美智雄他12名)を見ると、近世の文化を扱う項目は、順に「南蛮文化と桃山文化」「寛永期の文化」「元禄文化」「江戸町人の文化」「化政文化」となっている。桃山と江戸初期を別項目とし、元禄文化と化政文化の語を使っているので、ほぼ最新版『詳説』と同じ構成である。もちろん『詳説』が三省堂の教科書に近づいたのである。

*

*

以上戦後の日本史教科書の江戸文化の記述について検討してみた。山川出版社の『詳説』をはじめとする多くの教科書によって元禄年間と文化・文政年間をピクと見る典型が定着し、それが二十一世紀まで続いた経緯を明らかにしえたと考える。典型が文部省の学習指導要領に準拠していたことも確認することができた。

日本史概説書のレベルでは十八世紀後半の文化を重く見る史観も

登場していたが、研究者間の合意は形成されなかったらしく、なかなか教科書が採用するには至らなかった。『詳説』に限って言えば、二〇一四年の最新版がようやく英断を下し、元禄文化と化政文化の間に「宝暦・天明期の文化」という新たなセクションを設けるに至ったのである。おそらく今後の日本教科書の江戸文化の記述は、十八世紀後半に十分目配りした時代区分が主流となっていくものと思われる（続く）。